

精神文明の正義を護るが為に、科学も機械も採つて我が道具として莊嚴として来たのだ。欧米の強大国が到る所に弱小国を滅亡せしめて之を蹂躪し、遂には欧米人のみが優秀の人種であると堂々と誇張するに至つた彼等が、正義の宗教、眞実の精神文明をもたぬ証拠だ。日本は建国已來二千六百年、強國なるが故に他の侮を受けない。正義の國なるが故に他の弱小国を侵略し蹂躪した事はない。二千六百年來平和の國だ」と述べました。

カカ・カレルカール氏は更に私達が平然と妄語して弁解するやうに考へられたのでせう。猛烈な攻撃をせられました。「さうか、日本は平和の國なるが故に朝鮮を併呑し、満洲を横領し、支那を征服せんとするのか。印度をもやがて取ろうと云ふのか」

私はもはやいかなる弁解も無要だと気がつきました。私は一心に祈りました。日本の歴史は何日代までも侵略征服の血潮を以て汚し度くない。欧米の文明にとる所もあつて宜しが、欧米の躊躇所を予め考へて用心せねばならぬ。云ひ換へれば今日の日本は物質欲の権化の魔神となつてはならぬ。其室内にはパンジャーブ州のモハメッド・イブラヒム氏も乗合せて居りました。日本に対する觀察はカカ・カレルカール氏と同一であります。其室はアーメダバードのアシュラムの一団で殆ど占領して居りました。割合に広々としておるので此室に泊らないかとすすめられました。併し荷物の都合もあり、明朝下車の際に周章てもいけぬから、次の停車を待つて私達の本の室に帰つて臥せりました。

#4 ワルダ日記

十月四日

午前七時四十分ワルダの駅に到着しました。両個の荷物を持出して、先づバジヤージのバンガローまで尋ねて行か

うと相談してゐる所へ若い娘が二、三人、背の高い印度人が一人、其外ドヤドヤとホームに現はれて来ました。其人へバジヤージのバンガローへはどちらへ往けばよいかと聞くと、バジヤージは私だ、自動車を用意して来たから乗つて往けど云ふ事だ。娘達の中には興津師が孟買でカマラーデビー女史の許で顔馴染の人もあつて出迎に來てくれたのでした。

同行のサフ氏の話に、昨夜サフの名を以て電報を打つた所が、「サフ」のフの字を電報が誤つて「サドゥー」と改めた。バジヤージの方では、日本の二人の僧侶が今日の午後会見に来ることに約束してあつたので、日本の僧侶が打つた電報かと思ふてみんな出迎に來たと云ふことだ。サドゥーとはヒンドゥーの修行者の敬称であるから自然謬つて判読されたさうです。サフ氏もサドゥーの両名も俱に御迎をうくることに於ては、電報の誤も何等の差支も無かつたのでした。

バンガローは町外れの静かな畠の中に設けられて、駅から程遠くありませなんだ。サフ氏もモハメッド氏も俱に一室に入れて貰ひました。暑い処であるから先づ一番に水浴をすすめられました。浴室には大きいバケツに湯が充たされてありました。お茶、牛乳、味柑、芭蕉、菓子等が運ばれました。宛も日本に在りし日の、田舎の故郷に帰省した時のやうな穏な気分を此所に看出しました。

問も無く昼食の相図の鈴は鳴らされました。切石畳のベランダに鍵の手なりに二列に並んで約二、三十名の青年男女が居流れて居りました。胡坐をかいたり、立膝したりした姿勢で着坐しております。食膳の折りが終るとそろそろ食事にかかります。ロティー〔チャパティ〕が配られました。御米の飯も並いで配られました。それに醜醜をかけて頂くのです。牛酪もつがれました。果物も幾品も配られました。今日は大層な御馳走であります。新到來の私達の為

に、すわり乍らに名前の紹介がありました。

マホメダン〔回教徒〕の老人は何かしかつめらしい自「紹介をしました。興津師は私の名前を紹介しました。バジャージは若い娘さん達の紹介をしました。のぞいてみればまだ二十歳にはならないやうです。立膝や胡坐こそかいて居りますけれども、そのつましやかな姿は日本娘のやうです。或者は獄屋に四回も入った人ですと紹介されました。こんな人が何をしたのであらうかと疑ひました。牢獄に入った噂も別に誇りでも無からうが、恥かむ様子もみえませぬ。雨が降つた、日が照つたと云ふ位に考へて居るのかもしれません。こんな人々を率て牢獄から牢獄の生涯に導くガンディー翁の胸には、鬼神ならざる限り、涙が湧かずあり得ようか。

日本山の教団は未だ曾てかうした真剣な試練を経て居りませぬ。放逸の生活にいやな煩悶をせねばならぬのも、畢竟、多怨難信の境地に居かれていないからでせう。私は此の如きガンディー翁一門の人達の生活に敬意を表せずしてはおれませぬ。玉になる石は艱難の砥に擦らねばならぬ。

翁との会見は午後四時に僅かに十五分間を約束されてあります。此会見に私は申述べ度い事もあり、承り度い事もある。申述べ度いと思ふ条々を走り書して興津師に受けました。興津師は予めそれを英訳しようとしましたが、そんな余裕も時間も今日はありませんでした。

此の駅には手織木綿の販売店があります。そこにはハリジヤンと称する印度教の下層階級の為に、印度に於ては最初に開放せられた印度教の寺院もあります。午後は自動車でそこの見物をさせて頂きました。店にはガンディー翁の第三男、ラムダス・ガンディー氏が世話をして居りました。明朝ぬつくり訪問しやうと約束されました。手織木綿の卓子掛けや壁かけや袋やを求めました。色や模様は骨董品をあさるやうありました。其価格も安くはありませんんだ。

併し印度の人達の苦労に酬いねばならぬと思ふて八留比程も払ひました。私達にとつてはそれは滅多に無い大支出でありました。ヒンドゥーの御寺へ参りました。綺麗な黑白二色の大理石の床で、今しも掃除の最中でした。独立運動の首領たちの肖像やヒンドゥー教の近代の高徳やの肖像画が掲げてありました。神前は閉帳されてありました。

此の邸の執事に「自動車の準備が出来た。時間が四時にもない」と急き立てられて慌てて自動車にのりました。翁の住居でをられる塾は数丁東に寄つた畠の中にありました。自動車を下りてから法鼓を擊ち御題目を唱へて進みました。塾に到着するとガンディー翁夫人を初として、幾人かの女性が立出でて迎へてくれました。翁の居室は二階であります。案内につれて登つて往きました。

室の正面にはガンディー翁が半裸体で糸紡ぎの最中であります。左右には大勢の御弟子とバジヤージなどが侍つて居りました。それに面して新聞記者や、其外会見を求める人達が居並んで居りました。私達は其人達の前、翁の正面近くに誘導されました。敬礼をつくして合掌して、南無妙法蓮華經を三唱致しました。興津師は翁に私を紹介して、手土産の「あられ」一罐と扇子一本とを呈しました。「あられ」は先日孟買の笛倉信士から頂いたもの、扇子は神戸の信者から贈てくれたものであります。

曾て孟買のヴィクトリア埠頭に於て、翁が倫敦の円卓会議から帰つて来たのを迎へた時に見た面影よりは今日は若やいでみえました。童子の如く笑ひを含んだ顔は何等の屈託も無ささうであります。私が翁に就て一番心配して居つたのは其健康でした。翁の寿命は啻に印度人の為のみならず、私達の為にもどんなに尊い価値であります。私は我が無価の宝を握つたやうに今日の見参を喜びました。三億七千万の印度の人の苦惱を我が一人の肩に背負ふて、牢獄の生活と刑罰の余命とを余儀なくせしめられた尊い犠牲は、此所に糸を紡ぎ乍ら他愛なく笑ひ頽れて居る斯人であつ

たと思ふ時に、脆い涙は合掌した手にはふり墮ちました。此糸紡ぎの労働、それは何が面白いのだ。被るに着物なき貧しき同胞が乃至一人の恥をかくさんが為めの厚き志、親心ならで誰れかいかでか此ささやかなる労働の酬ひがさしも深く喜ばれるものか。糸紡ぎの車は翁の為には糸を紡ぐに非して、無限の慈悲と万斛の涙とをはてし無く繰り延べてくれる知己であった。

私が初めてガンディー翁に関する書物を読んだ時に、先づ此の糸紡ぎ車の絵を見て、それに興味をもち得ませなんだ。次第に翁に就て書物から眺めた時に此紡車が聊か面白く感じました。今日、形を離れた紡車を見た時に尊い光明をさへ感じました。人の心の信徳した所には唯だ光明のみあつて形体は忘れられるのでせう。

翁は私の贈物を受取て喜びました。喜び乍ら挨拶をされました。

「日本のものは皆美しくて安いのだが、それでも仲々高いものだ。日本はそれで印度を征服するつもりなのかい」興津師は私から授かつた見参の辞を前におき乍ら、それを説述して居る閑暇はありません。已を得ず隨問而答、「即答」せねばなりません。

「どの道ですか」と興津師は反問した。

「商品で」と翁は確答した。天産豊饒な印度が英國の為に搾取しつくされて、今日はどん底に陥つた。印度の貧を嘆き入つた翁の為には、いかなる不便を忍んでも、此上印度の富を外国へ流し失ひ度くないのだ。

「私達は僧侶だから商売のことは一向しりませぬ」と興津師は鮮に身をかはして切尖を外した。そして説明しなほした。

「此の御菓子は商品の見本ではなくして、私達の心づくしのしるしであります」

翁も、此見事な日本の進物二品が印度征服の密使でないことが信ぜられたらしい。日本人と云ふ民族は商人許りでもないのか。

「おお、そうかい、これも食べられるのかい」と翁は菓子箱についた綺麗な熨斗のしを取り外されました。

「いエ、それはかざりです。食べるのではないのです」と答へました。

「これもビスケットの一分かい」と菓子箱を包んで来た唐草模様を染抜いた小豆色の粗末な木綿の風呂敷を取あげられました。菓子を贈ると云ふのにあまりに多くの美しい、菓子より外の品物がついておるのに翁はあやしみを懷かれたのでせう。

「いエ、それはただ包むだけの木綿です。食べられませぬ」

と、興津師は受太刀をしました。それから話頭を転じて私の紹介をしました。私の在天三年に過ぐると云ふ噂をきかれで、

「英語が話せるかい」と翁は私の事をきかれました。何か一言でも直接に話す道を見出さうとする翁の気持ちでせう。

「英語を話すのは御嫌ひです」と興津師は弁明した。

「英語を話すのは嫌ひかい、それは結構ぢや、梵語か巴利語かはどうかい」と翁は重ねて尋ねられました。

「梵語も巴利語も存ぜられませぬ」と興津師は正直に告白しました。

「日本の仏法の僧侶は印度に来れば大概、梵語か巴利語かを勉強するものだが」と翁は私達の大膽なる無学を怪しまたいました。

「仏法は皆日本語で勉強致されました。梵語や巴利語の勉強は学者に任せて、私達は宗教的仕事に勵かねばなりません」

「ヒンディーは」と翁は重ねて問はれました。

「ヒンディーを純ら使はれておられましたが、一年半程セイロンに往かれた間に悉く

「初め印度に居られた時分にはヒンディーをもっぱら使はれておられましたが、一年半程セイロンに往かれた間に悉く皆ヒンディーも忘れられました」と興津師が答へました。

「ヒンディーを勉強しなさい。ヒンディーでお話をしよう」と私にヒンディーの修得を翁は親切にすすめられました。

「それは何かい、何所で擊つのかい」と翁は太鼓に注目して新話頭を開かれました。

「是は日本仏法の表象です。私達は時間さへ得ればどんな所ででも擊ちます」と興津師は応答しました。

「そうかい、孟買で毎夜日本の僧侶が市中を擊つて廻つて居ると云ふ噂を私も孟買で聞いた」と翁も承知されました。

「太鼓を擊つのは何宗かい」と翁の話は漸く進められました。

「日蓮大聖人に依て開かれた宗旨で、日蓮宗と称する日本国に七百年前に生れた宗旨であります」と興津師は説明しました。

「日蓮宗の人達は皆太鼓を擊つかい」

「いや日蓮宗の中でも商売的なものもあって、そんな人達は一心に太鼓を擊つて居りませぬ。私達は御師匠様に由て、一心に太鼓を擊つて南無妙法蓮華經と唱ふる事を教へられました。今ではお弟子も沢山あり信者も沢山ある一教

団であります」

最早や四時二十分を過ぎて居りました。翁は笑を含んで約束時間の超過を告げて、今日の会見の終りを結ばんとせられました。それにしても私は終始合掌瞑目して此の稀有の機会を感謝して居りました。会話に由て何を得ようと期するよりも、此会見に由てガンディー翁を獲ようと期しました。私は此時何の意見を聞ふとも思はねば、何を了解せしめようとも望みません。全印度の各新聞紙は今日の会見の模様を誌して「此二十分間の会見の間に私は始終御題目を唱へて祈念して居った」と書いてありました。まことに此二十分間は始終泣いて経てしまいました。

翁は「沢山の人が訪ねて來るので自然会見の時間が制限されることになった。一人の為に特に約束の時間を超過することも出来ないから」とつきぬ情を示された。

「御師匠様もまだ沢山御話し申上げたい事がありますけれども」と興津師も残る心を告げました。

翁はゆるやかに紡ぎ車を廻し乍ら、笑ひに其声さへ転げるやうに話し出された。

「私はつい先頃まで獄屋に囚人の生活をしたものだが、囚人は一向自由な時間を持って居らない。いつも典獄に由て囚人の時間は定められる。私は今此所に居つても監獄に居るやうなものぢや。此のバジヤージが典獄ぢや。私はもとの囚人ぢや。私が人に会ふのも寝るのも起るものも、皆バジヤージが決定する。バジヤージが十五分間人と面会してもよいと云へば、私は十五分間人と面会する。バジヤージが三十分間人と面会してもよいと云へば、私は三十分間人と面会する。バジヤージが一時間人と面会してもよいと云へば、私は人と一時間面会する。それだからなー、あなたはバジヤージに相談して下さい。次の会見はバジヤージが都合の好いやうに親切に取きめてくれるだらう」と翁は再会の機を作る可き暗示をされた。

「お話を自由に出来ませんので」と興津師は時間の制限よりも語学の不自由なのが又心配になるらしい。

「あなたの方の御話を書付けてお出なさい。話すよりはあなた達には書く方がまだ好いだらう」と私達の心を受入れる為に所有する門を開かうとして居られます。

既に制限を超えた時間は双方から無限に延長されてゆかうとします。私は応に暇乞をするべき時だと存じまして恭しく札をつくして御題目を三唱しました。翁も紡車から離した両手は口のあたりに合掌して、眼鏡越しに泌々と私達を見入つた其眼にはいつか湿ひさへもつて居りました。一言の話をさへ為し得なんだ遠い他国の者。僅かに二十分間の会見。嬉しくもあり悲しくもあつて只涙を催し来りました。夙世の因縁か現在の知音か。

パンガローに帰つてくれば、特設した新聞記者は私達に何かきかうとします。興津師は日本のビスケットの御話しから初めました。私は傍で聞いて居りました。

「征服と云ふ言葉を私達が使ふことが出来るものならば、私達は今日、印度を日本の仏教に由て征服せねばなりません。まことに印度は、今から一千三百年前に仏教に由て日本を征服しました。日本のあらゆる文明はそれから発展致しました。其仏教の恩恵に酬ふる為の私達の義務として、今日は日本から仏教を印度へ還さねばなりません」と対せねばならなかつたと氣をつけました。

「ハア、そうでした」と興津師は早速記者に話しました。記者も面白がつて書きました。

もしもガンディー翁が「日本は仏法を以て印度を征服するのか」と尋ねられたならば言下に「大にそうです」と肯定する筈であったが、日本から精神的な問題を提げて印度に乗込んで来たためしがないから、何ぼ私達が仏弟子であると云つても、私達が日本人である以上には、外国に出かけるからには、通商貿易の要件を加味せない事はあるまい、天の霹靂であらねばならぬ。

日本の今日の文明とは、印度に綿布を命にかけても売込まねばならぬ、もしも綿布を売込むことが出来ない事にならば一そ生きては日本に帰らぬ、と云ふけなげな決心さへして只今、死村の会商に日本の代表達は出かけておる、日本印協会も総領事館も総がかりで死村に会商して居る、そんなことでよいのか。落着いて其等の云ふ所を聞いてみれば英國人よりも一そ恥しい話だ。日本国にも綿布の外に外国に売出さねばならぬものがある。関税も運賃もかかるぬものだ。買手から一文も搾取することの要らぬ代物だ。日本民族の文明の結晶だ。滅亡の国家を復活せしむる靈薬だ。東洋を統一する原理だ。全世界を征服する爆弾だ。綿布の売込の為に建てられた日本国ではないぞ。一日丈け物質欲から離れて印度を見直したらどうか。死村で論議せらるる印度は其名の如く印度の死村だ。第一に名称から不吉だ。

高原の昼は暮れたらしい。竹の籬を隔てた綿畠に、今や伸びあがつた綿の木の木末に満月に近い月があらはれた。綿畠には高梁^{コリヤン}が混つて、之も今し穂が出かかつて居る。夜の景色は又満洲に似た所もある。私達はアシュラムまで晚のおつとめにお太鼓を擊つてまゐらうとしました。最早時間が迫つたからと云つて自動車で送つて貰ひました。

塾生の宿舎の庭でおつとめが行はるるのです。沢山の人達は、正面には男子、後方には女子、其の中央に床几に布団がしかれてありました。ガンディー翁の席であります。私達の為には翁の直ぐ傍近くに毛布が敷れてありました。私達は遠慮して毛布の後方に坐つて居りました。ガンディー翁の孫娘さんが来ました。扁桃腺を病んで治療をしたと

云ふことだ。アーメダバードで興津師が知己を得た某々はどこに居るかと聞くと、此所に居ない者は大方牢屋に居ると言ふ返事でした。牢獄と言ふ言葉は何の雑作もなく此所に使はれて居ります。我が志を行ふ所とでも云ふ意味にも解釈されて居りませう。大勢の小供も私達の周囲に集りました。併し唯我を忘れて立留つて居ると云ふ丈けで別に邪魔になるやうな喧嘩も致しませぬ。

合図の鈴の音につれて半裸体の翁は、ランプを前に照らさせて、二人の女の子の肩に両手ともかけて覚束無げに立出ました。自己の席に着く時に私達の姿が其目にうつりました。合掌して挨拶されました。隨身して居るバジャージにささやいて、私達を毛布の上まで進むやうにと申されました。衆中の一人が発唱すれば若干の人は合唱します。約三十分間程つとめられました。高原を離れた月影は昼の暑さを忘れたやうに澄みきつて、涼しい光を広い高原に斜に投げて居ります。一会の人はお互に何のあいさつをするでもなく順々と露地の上に坐るのであります。男女幾百名の多數であります。此人達は何所から出かけて来たのでせうか。

法要が終ると塾生の点呼があります。翁は席を立つて自分の室に帰られました。翁に並いで婦人の組が立つて帰途につきました。其あとで男子の組がぼつぼつ立あがりまして、私達の前まで迫つて来ました。三、四名の青年は、まだ坐つて居つた私達を踏みつけてはならないと云ふ警戒の為にか、手をつないで大衆を遮ぎりました。私達も立上らねばなりますまい。

ガンディー翁の三男と一寸会いました。明朝訪ねてゆかうと云ふ約束をしてわかれました。月の影を負ひつつ鼓を擊つてバンガローまで帰りました。私達のあとにも沢山の人が続いて居ります。前に帰途についた婦人の幾組かを超越してやがて帰りつきました。私は食欲が無かつたので晩には缺食致しました。みんなが心配して、乳をのめ、果物

を食べよと云ふてきさせぬ。それでは乳を頂きませうと申しました。

十月七日

西天開教の本誓願は時惟れ昭和八年十月七日、印度の中央高原の真中に位置する藁田の真理把握の道場に於て、印度独立運動の総帥、末代比類なき聖賢、マハトマ・ガンディー翁の為に説かれたのであります。私が筆録したのを興津師が英訳しました。二人とも、折しも満月の下に洋灯をかかげて、殆ど暁近くまでかかった事もありました。私のかくのよりも興津師の翻訳はどんなに困難であつたかもしれませぬ。興津師が此翻訳を終つた時に「もはや一代の仕事をした。熱病に罹つて死んでもよい」と涙を流して申しました。それ程に興味をもち力をいたのでせう。バジャージの書記は興津師の翻訳に助力してくれました。も一人青年英文学者が居りまして、其人について貴った所が、読みにくくと云つて片端から書直してしまひます。興津師は考へ出しました。文章斗り英文になつても私達の心持がかくれた時に何の意味だ。一そ日本人の英文でよいから私達の気分を直訳して差上げよう。不調法の文章の中からきっと私達の心を認めてくださることは出来るだらうと云つて訂正を拒みました。出来上つた文章を帛紗に包んで差上ました。今日も午後四時すぎ夕影涼しくなりかけた時でした。塾に到着した時に門弟の一人は立現はれて私達の鼓を制止した。バブジーが唯今階下の室で、医者の診察を受けて居るのだと理由を説明してくれた。

先づ階上の御居間に案内せられた。待つ間程なく半裸体の翁は無造作に席につき乍ら合掌答礼された。既に満面唯だ笑つて居られるのであつた。「羅漢聖者が人に会ふ時は毎に必ず先づ笑ふて対ぶ」と御経文を拝んだ事がある。心に叢雲がかかって居ては見知らぬ人に笑顔を以て対ふことは出来ない。かねて私も心掛ては居りながらなかなか及ば

ぬ尊い気分ぢや。

「先日は御目にかかることが出来まして深く感謝を致します。御師匠様が御話が出来ませぬから御手紙を認められました。私も英語が不自由で御わかりにくい事と存じます。もし此御返事が頂けましたならば幸と存じます」と興津師は定められた御挨拶を致しました。

私の手から興津師の手を経て差上げた御手紙をガンディー翁も亦手づから受取り乍ら、「是は君が翻訳したのかい」と聞かれた。

「どうも英語が不自由でして」と恥らふて答へた。

どうにかして我心を通ぜねばならぬと思へばこそ、こんな拙劣な英文でも翁の前に提出する勇気が出るのであらう。「是は上出来だ。結構、結構」と笑ひ乍ら恭しく受取られた。

「是は長い御手紙だ。今晚から明晚まで私は例週無言の行をつとめるのでお話も出来なくなる。御返事は或は二、三日さきに延ぶるかもしれぬがよろしいか。何時此所を起ちなさるか」

「一二、三日先で結構であります。御師匠様も此所の生活を大層喜んで居られますから」

「そうかい。それではゆつくり御滞在なさい。印度の食事が食べられるかい」

「大層結構に頂いて居ります」

傍に侍つて居つたバジャージは接待係として正直な所を報告した。

「師匠の人が飯を食べなかつた事もあつた」

「どうかしたのかい、どこかわるいことは無いかい」

「いや御師匠様はどこもおわるくはありませぬが、少しお疲れなさつたのです。あまり頭をつかはれましたからでせう。食べ物は牛乳や果物を頂かれて居ります」

「そうかい、私もお、ち、や果物だけ頂いて居る。何でも食べ度い物があつたらバジャージに云ひつけなさい」

翁は興津師の頭陀袋ずだくふくろに気がつかれました。

「その袋は破れたな」

「鼠が噛みました」とヒンディーで返答すると一座が皆笑ひ出しました。

「破れた所から中の物が洩れて居る。私が一つ袋をあげようか」

門弟の一人が「日本の木綿でなくてはいけないでせう」と申しました。

「イヤ、印度の手織木綿の方が結構です」

今日の会見は五分間に定められてありました。もはや御暇乞をせねばなりませぬ。

翁も行脚あんぎやの旅にたつ時は御頭陀袋をかけられる。門弟も皆、御頭陀袋をかけて歩行く。白木綿の袋を右の肩から左の脇へかける。蓋のきれが少し垂れて紐で結ぶやうにしてある。手提革袋かばんも木綿で作ったものを使って居る。其一個を日本に贈つてあげよう。

十月八日

午後四時にアシュラムに詣でてガンディー翁に見参し、御返事を頂くことが出来るのです。私達が御手紙を差上げたのは昨日の午後四時でした。多用の中にあの長文の御手紙を通読して頂くことさへ可なりな仕事であつたでせう。

恐らくガンディー翁が受取られた無数の手紙の中で、此の御手紙ほど拙劣な英文は未だ曾て無かつたでせう。而もそれが長いことに於ては又希有の長文であつたので、読む人の困難は一層でしたらう。昨日御手紙を差上げた時に興津師は、「翻訳が巧く出来ませんで」と申添へた所が、翁は此御手紙を受取て頁数をくり乍ら「これはお前が翻訳したかい」と尋ねられたので、「ハイ」と興津師は答へたものの、冷汗一時に背に流れたと申して居りました。ガンディー翁はさも満足な顔をして「さうかい、さうかい、それは上出来だ」と翻訳の劬勞をほめられました。

五日の晩の御つとめが済んで起ち上りかけた翁は、傍に侍して居つたバジャージ氏に耳語で「日本の坊様達は何をして居るのかい」と聞かれると、「翁に差上げる御手紙を書いて居ります」とバジャージが答へました。翁は「さうかい」と云つて起ち上つて、すぐ傍に坐つて居つた私達に合掌の礼をして席を去られました。私達がどんなことを話し出すのかと云ふ疑問よりは時鳥の初音に耳を聾てる心持でしたらう。

思ひ掛なき遠い他国の知音が思ひつのつて遙々尋ねて來たのだ。其真心を使ひなれぬよその言葉をかりて申のべねばならぬ。縷衣に纏まれても珠は光を失はぬ。心に写るものは矢張り心だと思います。翁は今晚から一昼夜間、例週の定めとして無言の行を脩して静思靜観の時間に入るから、ここ二、三日間は御返事は頂けまいと思ふて居つた私にとつては、あまりに早く出来上つた事さへ有難く思はれます。何につけても有難く思はれます。

自動車で塾に通ずる道に学校があります。今日は大勢の人達が学校の附近に集まつて居ります。どこから出かけて來たのか、牛車が幾輛も樹陰に繋いであります。蟻が熊野詣りをするやうに限りも無く土人が次第に校庭に集まつて来ます。午後六時からガンディー翁の演説会が開かれる、其聴聞の為に集まるのでした。自動車から下りて例の如く鼓を擊つて塾の門をくぐりました。二階のお居間に通されましたが、翁は階下で医者が診察して居ると云ふことでし

た。室に居並ぶ大勢の御弟子達も大分顔がなじみました。程無く席につかれた翁は合掌して答礼されました。

翁は「御返事が出来たから書いておいた。今差上の前に一度読んであげよう」と云乍ら御返事を読まれつゝ訂正し加筆されました。他の一部は秘書に渡して同時に訂正し加筆させられました。封筒の上書きをすると、私の名字の綴りを一字一書き正されました。

私は此御返事を頂いて、先づ感謝の辞を申述べ、続いて「此御返事は公開させて頂けませうか」と聞かせますと、翁は「よいとも、勿論公開してもよろしい」と答へられました。それから翁は「何日起つかい」と尋ねられました。興津師は「未だ二、三日は滞在します。御師匠様が此所を大層喜ばれて居りますから」と答へました。

「そんなら明日また御出でなさい。毎日午後四時になるとあなたの方の勇ましいお太鼓の音を聞くのが大層楽しみになつた。お太鼓の音は私も好きだ」

日本山の擊鼓宣令の反響は、印度独立運動の総帥、現代唯一人の聖賢、釈迦牟尼仏陀の血統を伝へし民族の代表者に由て、知音を表し共鳴を表し隨喜を表せられました。噫々、我西天開教の本誓願、果して時に中り機に応じたのであります。三億万の人の我が法音に対する隨喜の声は、今こそ藁田の塾の中に於て、溶くるが如き歓喜の声となつてガンディー翁の唇より洩れました。擊鼓宣令の妙行は仏教國の楞伽の國の無数の僧侶の中に知音を得ずして、熱心にすすむ程に却て軽蔑せられました。印度駐在の日本の總領事館の如きは、國際的の悪影響として所有する手段を以て非法の彈圧を講じて居ります。巷間の印度人は、嘲弄せぬ人は皆無関心でありました。結局私は、擊鼓宣令の正しき知音を印度独立運動の將士に求めるより外に、知音の機根は無いことをたしかめました。立正安國論の祈願は、到底亡國の奴隸に甘んじた者や、売國の利権に驕った生活を楽しむ邪人等の耳に入るべき音ではない。もしも耳に入るな

らば狂乱悶絶して誹謗するより外になすべき道をしりますまい。

名利の為の外交官、三文雑誌の翻訳仏教学者達が不眞面目なる認識の上に我擊鼓宣令の正体がわかりかねたのが当然であらねばなりませぬ。そんな者等の手に入るような法門であれば、やがて英國の警察に踏み潰されてしまはねばならぬ。おお、眞実に身命を捨てて印度の独立を願ふ人であつたならば、いかでか此立正安國の大祈願が反響を起さずして已みませう。衆生の苦惱をかなしむ者、祖国の滅亡^奪を慨く者が、どこに此立正安國の祈願を柔軟に信受せられぬ理由が存しませう。

私達の擊鼓宣令の法鼓の音を聞くのが楽しみだ、と翁の喜びを聞いて、三千大千世界の到る所に知己を得なかつた私は「此人なればこそ、此人なればこそ」と思ひました。此人を外にして誰れに印度の立正安國の法門が物語られよいものでせう。立正安國の祈願、擊鼓宣令の法音は今正しく西天に伝はりました。ガンディー翁が南無妙法蓮華經の法鼓を擊ち、日本の仏弟子が其一門に暮す時に、印度の独立は近き日に決定致されたわけであります。噫々、我が高祖日蓮大聖人に負はされた日本國の重い使命を、末法の今日西天に果すことが出来ました。いかに私を賤しむ者があつても誹る者があつても、苟も法華經の第六の卷、如來壽量品の遣使還告の使命を西天にはたしたことに於て誰れが否み得る者でせう。永の間私の守り来つた苦節も、今日のガンディー翁の一言に私には酬はれであります。私の擊鼓宣令の法門は茫茫たる三千大千世界の中に、唯此人を求めて鼓を擊つたのでした。此人は果して我が此人でした。ガンディー翁は果して我がガンディー翁でした。

日本の甘い菓子にさへも美しい扇子にさへも乃至木綿の商品にも、印度の為には怨敵とさへ認められた翁、況や日本政策国策のいかなるものにも敵対の感じに充たされた翁、其翁が、今日勿^だち日本神代の古樂、立正安國の祈願た

る南無妙法蓮華經の法鼓のみは何の疑念も挿まずに、直ちにその信仰生活の無二の知音として信受せられました。

日本仏法の名を以て打ち鳴らされた法鼓の響は、即ち西天薦田の翁の理想信念を資くる天鼓^{てんぐ}の妙音ともなりました。印度の独立運動の陣太鼓はガンディー翁が笑ひ頽れて擊つ一張の团扇太鼓の妙音であります。ガンディー翁が、我日本山の西天開教の本意に隨喜して日本仏法の擊鼓宣令の妙行を歎喜し遊樂し、かくして印度が独立する時に、我が日本の為に、日本仏法の為に、如何なる役割を果したかと云ふ事を浮薄なる世間の人達はやつと論議することが出来りませう。私達一人も翁につりこまれて笑ひくづれて喜びました。夢ではないかと思ふ程でした。

興津師は、「お太鼓が御好きですか、それでは一張差上げませうか」とて私が西天開教にたつ時に宮本信士から贈られた尺一寸の雨風に曝^{さら}された古い团扇太鼓を進み寄つて翁に差上げました。

翁は高らかに笑ひ出して受け取られました。

「私にお太鼓をくれるかい。私も撃たう、はは」

私も前においていた团扇太鼓をとりあげて撃ち出しました。

「南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經」と申して太鼓を撃つと、翁も笑ひ乍ら御手紙の上でみた南無妙法蓮華經の記憶を辿り乍ら覚束なげに撃ちそめられました。

興津師は愈々乗気になつて「私、教へてあげませう」と申しました。こだわりの無い姿と云へば云へもしよう。何と云ふ謹しみの欠けた言葉であらう。しとやかな徳をしらぬ傲慢の英語の中には、此んな言葉が此人に対してでさへも使はれることが習慣づけられたであらうか。いかにも奥底しさの無い人だと此人に映つたであらう。私は眞赤に顔が染まつた。ああ、しまつた。

翁は「教へてくれるか、よしよし、アハ……」と笑ひ乍ら太鼓を擊つて興じて居られました。此聖者の、謙遜^{クニ}を虚うして対手の氣分を全分に活かしてくれる、尊い応接の教化がわからぬであつたらうか、ああ見苦しかつた、と思付いた時は場面は及ばぬ所に過ぎ去つて居つた。

傍に居た侍者は「明日は無言の御修行ですからお話が出来なさらないのに、此人達が此所へ来ても宜しいですか」と不審を訴へた。

「お話は出来ないが此所に坐つて笑顔を見る丈でもよいではないか。御坊さん達が御太鼓を擊つて此所へ来てくれるのがたのしみぢや」

かかる親しみの氣分が三億七千万の同胞に注がれた時に、印度の人は同音に「バブジー」「バブジー」と叫んだのだ。「お父様」「お父様」と云ふ敬称はまさしく此聖者に相應する名前であらう。法華經の到る所に仏様が如來は衆生の親ぢや、親ぢやと仰せられたのを拝みました。其広大なる親の氣分は此人に伝はつて居つたのだ。

「ゆつくり此所に滞在しなさい。滞在中は毎日此所へ御太鼓を擊つて御出でなさい」

私達の会見はかくして無限に延長せらる可き道筋に出ました。擊鼓宣令の法音が両方を同じ歓喜の糸に結び付けました。噫々、私には大きかりし鼓の音の妙用が深く感ぜずに居られませぬ。

一度バンガロー迄帰つて間も無く、五時過ぎから学校の演説会に参ることに致しました。聴聞の大衆は広々とした練兵場のやうな芝生の校庭を行儀よく埋めつくし、なほ道路に立並んで居ります。講壇は玄関の上のベランダに設けられました。私達両名も演壇に案内されました。まだ開会には一、三十分間あります。私達は演壇の一側に立上つて居並んで居る大衆に面してお太鼓を擊つて御題目を一心に唱へました。

五時半過ぎからガンディー翁は登壇着席せられました。着席し乍ら私達に合掌敬礼して、「あなたの御太鼓は何所にあるのかい」と興津師にきかれました。その御太鼓は一時間前から翁の手許に差上げられてあつたのでした。

バジヤージに由て開会が宣せられ、目次通りに順々と祈りや讃美やがつとめられました。日暮に暮るる六時を過ぐる頃から、約二十分間もガンディー翁の演説がある筈でした。併し講演は筆記として若い青年の御弟子に代読させました。演説が終るとそろそろ帰りかかる者も出来ました。

今晚の御祈りは此所で此まつとめることになりました。おつとめが済んでガンディー翁が退場する時には既に電灯がついて居りました。私達は立上つて擊鼓宣令して見送り申ました。聴聞の大衆も絡んだ糸を牽くやうに段々と帰つて往きました。バジヤージ氏は「もう帰ろう」と私達を促しました。階段を下りかかるときに、汽車の中で不殺生戒の法門で衝突したまま気持悪く別れた、翁の秘書、カカ・カレルカール氏は「大変宜しい御祈りでした」と私にも興津師にも一々丁寧に挨拶されました。殺生戒でも不殺生戒でも論議すれば一致しない両方の者も、擊鼓宣令の妙音は歓喜し隨喜して同一心地に聞くことが出来ました。

今日はガンディー翁に法鼓を授与した日でした。今日はガンディー翁の演壇に大法鼓を擊つた日でした。印度革命運動の中に日本から送られた立正安國の祈念の天鼓が響き渡つた日でした。是より後の西天開教は唯だ今日の延長であればよいのです。印度民族の心遂醒悟^{しんすいようご}の時が正しく今日であります。印度を覆ふた長夜の闇が是からはれるのでせう。